

ゆとりの構造化に向けて (2)

—「ゆとり」と「くつろぎ」—

西野 仁 (東海大学)

I. はじめに

「ゆとりとは何か」をめぐって1998年以来、本学会で発表を続けてきた。当初は、社会心理学の手法の一つであるESM調査をもとに高校生と中学生の「ゆとり」経験の実態を記述し、「選択の自由性と内発的動機」によって惹起された経験で、「さわやか」「ひま」「まんぞく」「うれしい」などの「ムードのポジティブさ」を伴い、「継続したい」と感じる比較的「簡単にできる」経験の総体として捉えられていることを明らかにした。ついで、「ゆとり」というきわめて日常で普通に使われている言葉が、本来どのような意味を持ち、どのような概念を内包しているのかを明らかにするために「ゆとり」という言葉と概念の整理を行うこととした。その過程で、『「ゆとり」という言葉は、「余裕」「窮屈ではない」「くつろぎ」の意味を持つ比較的新しい言葉であり、leisure, something to spare, latitude, leeway, elbowroom, breathing spaceなどと英訳されていること。しかし、「余裕」や「窮屈ではない」という意味合いでの使い方に比べ、「くつろぎ」という使われ方は少ないこと。「ゆとり」という言葉は、主観性、保障性、肯定的価値性、自由裁量性、相対性などのニュアンスを持つこと。』などが明らかとなってきた。

「余裕」が「選択の自由性と内発的動機」による「ゆとり」経験を可能にするが、その「ムードのポジティブさ」は、「くつろぎ」と表現される心的状況ではないだろうかと思えてきた。そこで、「くつろぎ」に注目し、その持つ意味を探ることとした。

II. 「くつろぎ」という言葉

1. 辞典にみる「くつろぎ」の意味

「くつろぎ(寛)」は、「くつろぐ」の名詞形で『くつろぐこと。ゆったりすること。余裕。』などを意味する。(広辞苑、1976; 辞海、1954; 広辞林、1984; 大辞林、1995; 新辞源、1963など)他に、『のびのびすること。ゆったりした気分になること。また、そういう気分。』などとの解釈もある。(国語大辞典、1982) (注:「くつろぎ」の語は、能楽用語としての意味を含むが、ここでは、それを除いた。)

漢字「寛」の解字は、『家の広いことを言い、ひいて、心の広いことで』あり、字義は、『①ひろい(し)。ゆとりがある。ゆったりしている。②ゆるやか。ゆるい。③ゆたか。心が大きい。度量がひろい。④いつくしむ。めぐむ。⑤ひろさ。はば。』である。(角川漢和中辞典、1998)

「くつろぐ(寛ぐ)」は、自動詞と他動詞とがあり、自動詞では、『①ゆるくなる。ゆるむ。②ゆるやかに起座する。打ちとける。ゆったりする。のびのびする。休息する。③余地がある。余裕がある。④安心する。落ちつく。』などを、他動詞では、『ゆるやかにする。余地を作る。』を意味する。(広辞苑、1983)

2. 古語辞典での「くつろぎ」の扱い

時代別国語大辞典上代編には、「くつろぎ」は載っていないが、『ゆたか(豊・寛)』『ゆたけし(寛・広)』はある。『豊富なさま。満ち足りているさま。ゆるやかなさま。ゆとりがあつて、おうようなさま』などと説明されている。なお、上代語は『七・八世紀の日本における共通語としての中央貴族階級の言語』と概説されている。(上代語辞典編集委員会編、1967)

時代別国語大辞典室町編には、「くつろぎ」「くつろぐ」が載っている。『くつろぎ(寛)①密着していた状態がゆるんで生じた隙間。②必要を満たしたあとにさらに残されている余分の空間。③張り詰めていた状態から解放されて気持ちの上でゆとりを持つこと。』『くつろぐ(寛ぐ)①きつく締まったり密着したりしていた状態が緩和して、隙間やゆとりが生じ、ゆったりとなる。②心をひきしめ緊張を強いられている状態から解放されて、気持ちの上でゆとりができてくる。③病気について、危篤状態から脱して、小康状態になる。④仕事などから解放されて、心身を休ませる。⑤人が緊張を欠いて、だらけた態度をとる。』とある。(室町時代語辞典編集委員会編、1989)

江戸時代用語考証事典では『くつろぐ(甘ぐ)ゆとりがでる。のびのびする。』と記載されている。(池田

正一郎、1984)

古語辞典では、くつろぎ(寛)を「くつろぐ」の名詞形として、『①ゆったりしていること。のびのびとしていること。②ゆとりのある間隔。③財政的なゆとり。』などとし、「くつろぐ(寛)」を『①引き締まっているものが、緩んですきまができたり、ぐらぐらしたりするようになる。ゆるくなる。②他のものが入る余地ができる。余裕ができる。③緊張が解けて、ゆったりする。のびのびする。④からだを休める。休息する。⑤人にうちとける。』と他動詞『①ゆるくする。ゆるめる。②緊張を解きほぐす。のんびりした気分させる。』としている。(角川古語大辞典、1984)

3、語誌

「くつろぎ」の起源や意味・用法の変遷については、『平安時代の用例は、冠がゆるむ・居る場所がゆったりしているなど、物理的にもものが密着していない状態をさして使用されている。そのゆるみを心の余裕に置き換えた、心が休まる・安心するなどの心理的用法が中世から現われる。前者の用法は、ユルムなどの語にその意を譲り、江戸時代にはその生命を終える。心理的用法は緊張状態にない意から、緊張状態をとく意へと拡大し、意味用法を広げた。』と説明されている。(日本国語大辞典、2001)

4、類語

名詞「くつろぎ」の類語としては、『ゆるみ。ゆるやか。』や『憩い、休らい、休み、御茶、ティーブレイク、コーヒーブレイク』(日本類語大辞典、1974)などが挙げられる。また、動詞「くつろぐ」は、『寛ぐ：仕事や心配事などを忘れ、窮屈な格好をやめるなどして、心身をゆったりさせる。打ち寛ぐ：「くつろぐ」の強調表現。憩う：のんびりと心身を楽にして自由な時間を過ごす。休らう：憩う。「安らう」とも書く。気楽にする：心の緊張をほぐし、気持ちゆったりさせる。リラックスする：くつろいだり気楽にしたりすること。膝を崩す：窮屈な正座から楽な姿勢になり、くつろいだ態度をとる。袴を脱ぐ：かたくるしいことをやめてくつろいだ態度をとる。羽を伸ばす：抑圧するものから解放されてくつろぐ。』に加え、『休む。休憩する。休息する。一休みする。一息入れる』さらに、『休養する。保養する。静養する。骨休めする。英気を養う。充電する。』などが挙げられている。(類語大辞典、2002)

5、政府刊行物に見る「ゆとり」と「くつろぎ」の使われ方

「ゆとり」を扱っている政府刊行物で、「くつろぎ」という語はどのように扱われているのだろうか。

通商産業省のゆとり社会の基本構想には、「ゆとり」を余裕として捉えることに終始し、「くつろぎ」の意味はとりあげられてはいない。

文部科学省の「ゆとり教育」は、中央教育審議会の答申のポイント『これからの教育は[ゆとり]の中で[生きる力]を育成する』に端的に表れているように、「余裕」のある教育環境、「余裕」を持って「生きる力」をはぐくむことの提案であった。「生きる力」については説明があるが、「ゆとり」については特に解説は見当たらず、学校週5日制、教育内容の厳選によって授業時数の縮減などで[ゆとり]を確保するという具体策の提示である。いわゆる「ゆとり教育」については問題視する論調が多い。(西村、2001など)そうした状況の中で、外山は、物理的余裕の増大が「ゆとり」の増大につながるという考えを疑問視し、「ゆとり」は、物質的・物理的な状態だけではなく、心理的に安定し、追い立てられていない、安心した状態こそが最重要と述べ、古代ギリシャのスコレーを紹介しながら、「ゆったり学ぶ」ことを主張している。(外山、1999)しかし、「くつろぎ」についての論及はほとんど無い。

これらの事実から、「ゆとり」の論点の中心は、「時間・空間・経済的余裕」が中心であって、「くつろぎ」についてはあまり論議がなされていない現状が見えてくる。

6、「くつろぎ」の英訳

名詞「くつろぎ」の英訳は、ease と relaxation である。(新和英大辞典、1995) 動詞「くつろぐ」は、relax: be at ease, feel at ease, make oneself comfortable [at home], unbend (oneself) などとなる。他に、「くつろいだ」の訳に casual があてられている。(新英和大辞典、1995; ジーニアス和英辞典、2003)

ease の和訳は ①楽、くつろぎ、安静、安楽 ②気楽、安気、安心 ③堅苦しくないこと、安易、気軽 ④容易、平易さ ⑤困らないこと、裕福 ⑥ ゆるさ、ゆとり であり、relax は ①緩める ②寛大に

する、緩やかにする、和らげる、軽減する ③ 緩める、緩慢にする ④精神的緊張から解放する、寛がせる、楽にさせる であり、relax from a state of tension 緊張の状態からくつろぐ のように使われる。また、relaxation は、①緩み、弛緩 ②軽減、緩和 ③休養、休息、息抜き、くつろぎ;気晴らし、慰み、娯楽 と訳され、His chief relaxations were hunting and shooting.のように使われる。casual については、④打ち解けた、くつろいだ の訳が見出される。(新英和大辞典、1995.)

7、Leisure 研究での relaxation の記述

1916年に発刊された Psychology of Relaxation において、Patric, G.は、relaxation の研究の必要性を指摘した。Shaw は、日常生活におけるレジャーの意味に関する研究において、“Leisure situations are characterized by high levels of enjoyment and relaxation, while non-leisure situations are low on both factors.”(Shaw, S.M., 1985) であることを明らかにしている。また、Lee と Howard は、レジャーの一般的な記述として、“Leisure is something relaxing not stressful” was a common description among the participants.”(Lee, Y., Dattilo, J. and Howard, D. 1994.) さらに、Kleiber は、レジャー経験の社会心理学的考察の中で、“...to do something “leisurely” is to do it “casually” or “in an easy, relaxed manner” that implies an abundance of time.”(Kleiber, 1999) と解説している。

英語 leisure は、「くつろぎ」をその意味の中心に置いていると解釈できる。

Ⅲ. 「ゆとり」と「くつろぎ」

1、物理的・量的装置としての「ゆとり」と心的・質的経験としての「くつろぎ」

「ゆとり」は、「余裕」、「窮屈でないこと」、「くつろぎ」の意味を含んでいる。しかし、「ゆとり」は、経済的ゆとり、時間的ゆとり、空間的ゆとりなど使われる場合に明らかなように、「余裕」を意味することがきわめて一般的である。しかし、西野の「ゆとり」調査では、高校生、中学生は、「家族と居るとき」「自宅で」「入浴、うたたねや食事、テレビを見ているとき」に、「ゆとり」を感じている場合が多かった。(Nishino, 1977; 西野 2002 など) また、大学生は、同伴者は「家族と居るとき」次いで「一人」「友人と居るときに」、場所は「大学の屋上」「カラオケボックス」「彼氏・彼女の家」で、活動は「カラオケ、ショッピング、テレビ・ビデオの視聴、うたたね、食事」に「ゆとり」を感じている。日常生活での「ゆとり」気分は、『落ち着きがある。ゆったりとする。ゆっくりする。のんびりする』などと表現される「くつろぎ」と同質ではあるまいか。

前述のように、「くつろぎ」を表す漢字「寛」は、「広いこと」をいい、字義には、『ゆとりがある。ゆったりしている。ゆたか。ひろさ。はば。』などを含み、「くつろぎ」は「くつろぐこと。ゆったりすること。余裕。」をさす。また、「ゆとり」は、「余裕」を第一義とし「くつろぎ」の意味を付しているのに対し、「くつろぎ」は、「ゆったりする」「のびのびする」などの名詞形「くつろぐこと」を第一義とし「余裕」を加えている。このことと、「くつろぎ」の語誌をあわせ考えると、「くつろぎ」が持ち合わせていた「物理的な余裕ある状態」は、「ゆとり」という言葉に移り、「くつろぎ」は心理的な「余裕」から、さらに、緊張を解く「くつろぐこと」へと広がったと推測できる。

かつて通商産業省が「ゆとり」を、「ゆとり = f{(経済的ゆとり+時間的ゆとり+空間的ゆとり) × (精神的充足度)}」と捉えることを提案した。この式において、「(経済的ゆとり+時間的ゆとり+空間的ゆとり)」は物理的な「余裕」を、「(精神的充足度)」は心理的な「余裕」をさすことになろう。経済的ゆとりは可処分所得の量、時間的ゆとりは自由裁量時間の量を、空間的ゆとりは住空間や生活空間の余裕と、余暇環境の充実度をさし、それらはいわば、「ゆとりの物理的・量的装置」である。その装置を使って、あるいはその装置の存在により、「寛ぐ、憩う、休らう、気を楽しめる、リラックスする、膝を崩す、羽を伸ばす」などと表現される「心的・質的経験」を「精神的充足度」として独立変数に加え、「ゆとりの総量」を定式化したと解釈できよう。その「心的・質的経験」は、「休養と保養」から、「自己表現や自己実現」などにいたる多様な経験が含まれようが、その中心は「くつろぎ」の経験であろう。この式が示すように、「装置の増加・拡大だけでは、「ゆとり」の総量は増加しない。総量の増加には「心的・質的経験」から得る精神的充足度の増加、特に「くつろぎ」の増加を伴う必要がある。

2、「くつろぎ」に関係する要素

くつろぎを「寛ぐ、憩う、休らう、気を楽にする、リラックスする、膝を崩す、羽を伸ばす」などと表現される「心的・質的経験」と捉えた時、それは主として、「人、活動内容、場所（環境）」が大いに関係するはずである。「くつろぎ」のくわしい調査は現在進行中であるが、それは、「誰と」、「どこのどんな環境で」、「どんな活動を」という生活の文脈との関係で理解される必要がある。

IV. まとめ

「ゆとり」という言葉は、「余裕」「窮屈ではない」「くつろぎ」の意味を持つが「くつろぎ」という使われ方が少ないことに注目し、その意味や語誌、使われ方などを探り考察した。「くつろぎ（寛）」の「寛」は広いことで、『くつろぐこと。ゆったりすること。余裕。』などを意味し、平安時代には使われていた。当初持ち合わせていた「物理的な余裕ある状態」は、「ゆとり」という言葉に移り、「くつろぎ」は心理的な「余裕」から、さらに、緊張を解く「くつろぐこと」へと広がったと推測できる。類語には、憩う、休らう、リラックスする、羽を伸ばすに加え、休養する、保養する、さらに英気を養う、充電するなどが見られる。政府刊行物では、「ゆとり」を余裕として捉えることに終始し、「くつろぎ」の意味はとりあげられてはいない。その英訳は、*ease* と *relaxation* であり、*casual* も時として「くつろぎ」の意味を持つ。*leisure* 研究の領域では、*easy, relaxed, casually* などが *leisurely* と強く結びついているとの指摘があり、*leisure* は、「くつろぎ」と訳すことが適当な場合が多くあると思われる。「ゆとり」は、「余裕」を第一義とし「くつろぎ」の意味を付しているのに対し、「くつろぎ」は、「ゆったりすること」「のびのびすること」を第一義とし「余裕」を加えている。物理的・量的装置としての「ゆとり」と心的・質的経験としての「くつろぎ」という使い分けが一般的のようだ。生活の質を高めるためには、「余裕としてのゆとり」とともに「くつろぎとしてのゆとり」の双方が重視される必要がある。今後、日常生活経験と「くつろぎ」の関係についてさらに、研究を進めたい。

主な参考文献

論文など

- Kleiber, D. 1999, Leisure Experience & Human Development, Basic book
Lee, Y., Dattilo, J. and Howard, D. 1994., The Complex and Dynamic Nature of Leisure Experience, *Journal of Leisure Research*, 1994,26-3
Nishino, H. 1997, Will the Two-Day Weekend Bring More Leisure (Yutori) to Japanese Adolescents?
Shaw, S.M., 1985, The Meaning of Leisure in Everyday Life, *Leisure Science*, 7-1
外山滋比古 1999 ゆとりの今日的意味、山極・武藤編「ゆとりある教育活動」ぎょうせい
西野 仁、2002、中学生の一週間の生活リズムと「ゆとり」の構造について、平成 11 年度～13 年度科学研究費補助金成果報告書
西村和雄編 2001、ゆとりを奪ったゆとり教育、日本経済新聞社

辞典類

- 上代語辞典編集委員会編、1967、時代別国語大辞典上代編、三省堂
室町時代語辞典編集委員会編、1989、時代別国語大辞典室町時代編、三省堂
日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編、2001、日本国語大辞典、小学館
柴田武、山田進編、2002、類語大辞典、講談社
中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義編著、1984、角川古語大辞典、角川書店
増田綱他編、新和英大辞典、1995、研究社
小稲義男編、新英和大辞典、1995、研究社
広辞苑、辞海、広辞林、大辞林、新辞源、国語大辞典など